

トリ^もア^リ森^にの三人どろぼう

カリンケ作 植田敏郎訳



◆ 世界の幼年どうわ・9

トリーア森の三人どろぼう

イルムガルト = カリンケ作・植田敏郎訳

N. D. C. 943 偕成社 昭和44年 p. 126 21cm

Kalinke, Irmgard: DIE RÄUBER VOM TURIA-WALD

発行 昭和44年2月20日 ©

訳者 植田敏郎

発行者 今村 広

印刷者 草刈親雄

発行所 株式会社 ^{かい} 偕 ^{せい} 成 ^{しゃ} 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

振替 東京 1352番

本文印刷 中央精版印刷株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社





トリニア森の三人どろぼう

イルムガルト＝カリンケ作

植田敏郎訳

池田龍雄画

世界の幼年どうわ

DIE RÄUBER VOM TURIA-WALD

by Irmgard Kalinke



Original German language edition published by K. Thienemanns Verlag, Stuttgart.

Copyright © 1965 by K. Thienemanns Verlag.

Japanese translation rights arranged through Orion Press Co. Inc., Tokyo.

* はじめに

トリーア森もりというドイツのくらい森もりのおくふかくに、三人にんのどろぼうがすんでいました。のっぽと、でぶっちょと、ちびっこです。おまわりさんたちもつかまえることができなくて、村人むらびとからは、「トリーア森もりの三人にんどろぼう」とおそれられていました。

ある夜よ、はらぺこになったどろぼうたちは、ちかくのひゃくしょうやから、子牛こうしをぬすみだしてたべようと、そうだんします。三人にんは、このひゃくしょうをうすのろだとおもい、ピストルももたずに村むらへでかけました。ところが、森もりのでぐちには、そのひゃくしょうがたっているではありませんか。さあ、どろぼうたちは、どうしたでしょうか。

うえだ としろう



もくじ

- 1 ためいきをついた 三人ぐみ^{にん}……………10
- 2 よくないそうだん……………20
- 3 ひやくしょうの てつだい……………34
- 4 すばらしい ひるごはん……………42
- 5 クノイスレさんの たのみ……………46
- 6 おそろしいどろぼうの うわさ……………51
- 7 うまのすきな でぶっちょ……………56
- 8 うそのつきほうだい……………63



9 あわてたもうひとりの だろぼう……71

10 三人ぐみではない！……80

11 だろぼうじゃない だろぼう……85

12 あたらしいやとい人……91

13 ひげをそった だろぼうたち……102

14 おどろいた 三人……108

15 三人のわかものと 花よめさん……115

「トリーア森の三人だろぼう」

について（解説）……124



筆者紹介

原作者 カリンケ 1929年、南ドイツのウルムに生まれる。ロイトリンゲン、バインガルテンの師範学校を卒業後、南ドイツの各地の学校で教師生活をつづけながら、創作にはげむ。

訳者 ^{うまたとしろう}植田敏郎 1908年広島県生まれ。東京大学独文科卒業。現在、一橋大学教授、日本児童文芸家協会会員。独文関係の翻訳紹介につくし、「ザリガニ岩の燈台」「グリム童話集」等訳書多数。

画家 ^{いけだたつお}池田龍雄 1928年、佐賀県生まれ。多摩美術学校卒業。アートクラブ会員。現在、装丁や児童物のさし絵などで活躍。





「どろぼうだー！」というこえに、ひゃくしょう
たちは、はだしのまま、とびだしてきました。

トリ
ー
ア
森^{もり}
の
三^{にん}
人
ど
ろ
ぼ
う

植カ
田リ
敏ン
郎ケ
訳作



Ⅰ ためいきをついた三人ぐみ

トリーア森もりのおくふかくは、とてもたくさんきの木がしげっていて、木きのあいだから、むこうがみえないくらいです。ほらあなが、一つあるのも、ちょっとききがつかないほどです。

もちろん、よる、こんな森もりの中なかへは行っていく人ひとはありませんが、もしそんな人ひとがいたら、ほらあなのまえのあきちに、小さい火ひが、ちよろちよろと、もえているのをみかけるかもしれません。

そこが、トリーア森もりの三人にんのどろぼうのすみかです。

よるになると、三人にんは、ほらあなのまえにすわって、あれこれと、わるだくみをはなしあっているのです。

三人にんのどろぼうは、めいめい、ちっともにいていません。

ひとりめは、とてもおっぽで、
おまけにやせっぽち。

ふたりめは、たるのように、こ
ろころとしていて、すごくでぶっ
ちよ。

三人^{にん}めは、せむしで、まるで小^こ
人^{びと}みたいにちびなんです。

のっぽがかぶっているのは、ま
っくろいからすのはねのついた、
まっかなぼうし。

でぶっちよのは、きらきらかが
やく、にわたりのはねのついた、
みどりいろのぼうし。



それから、ちびっこのは、くろと白しろのかささぎのはねのついた、きいろいろぼうしです。

三人にんとも、もしやもしやしたあごひげをはやして、ベルトには、ナイフと大きいピストルをさしています。

このどろぼうどもは、もうずっとま

えから、ちかくの村むらをあらしまわっていました。

人ひとをころしたことはありませんでしたが、目めにつくものは、さいふでも、ネックレスでも、たべものでも、じてんしゃでも、にわとりでも、おさけのびんでも、てあたりしだい、なにもかも、ぬすみました。

ざんねんなことに、おまわりさんも、この三人にんのどろぼうたちをつかまえることは、できませんでした。ですから、村むらの人ひとたちは、よるも、ひる



も、びくびくしてくらしていました。

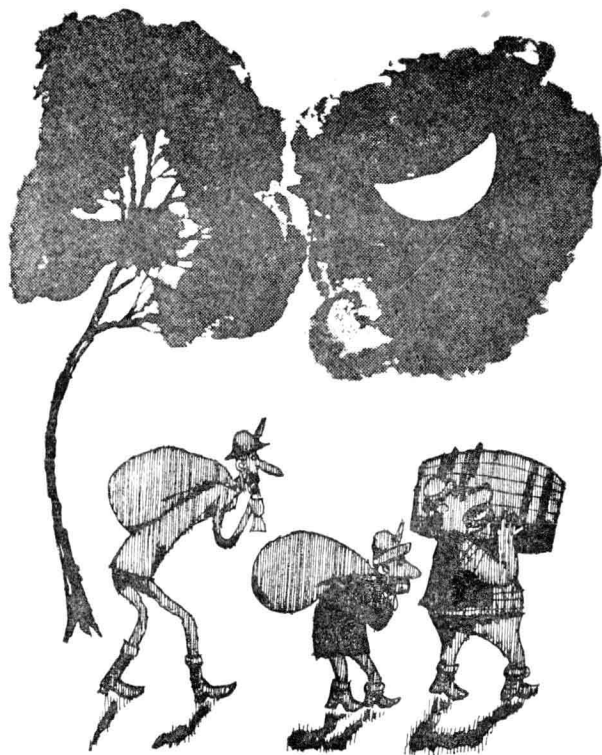
こんやもまた、三人にんのどろぼうは、たきびのまわりにすわって、ちよろちよろともえあがるほのおを、じっとみつめていました。

のっぽが、ふーっと一ひといき、パイプのたばこひとをすいこみました。

でぶっちょは、ぶどうし
ゆを、ぐっと一ひとくち口、のみま
した。

ちびっこは、ぼうきれ
で、火ひの中なかをかきまわしま
した。そして、

「おい、きょうだい、こい
つはいったい、なんてみじ
めなくらいだろうな！」



と、いいました。

「おれだって、そうおもう。」

でぶっちょが、さんせいしました。

「そのとおりだとも。ほんとうは、どろぼうなんか、大^{だい}きらいさ。いつまでもつづけていたら、おれのしんけいは、だめになっちまうよ。」

のっぽも、ぶつぶついいました。

でぶっちょが、ふくれっつらをしていいました。

「ああ、ああ、なにか、もうかるしごとはないかなあ。ここには、いいことなんか、ちっともないぜ。つまらんことばかりさ。」

「そのつまらんことのために、おれたちは、あくせくはたらかなくちゃならない。このぞっとするような、ほらあなにすんで、年^{ねん}がら年^{ねん}じゅう、おまわりを、こわがっていなきゃならないんだ……。

おれは、やばん^{ばん}人のシヨルシュが、むかしからどろぼうにせいをだし、

